

Title	読みと歴史認識の方法をめぐって：津村喬の思想史的研究
Author(s)	鎌倉, 祥太郎
Citation	大阪大学, 2016, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/55699
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

論文内容の要旨

氏 名 (鎌 倉 祥 太 郎)	
論文題名	読みと歴史認識の方法をめぐって —津村喬の思想史的研究—
論文内容の要旨	
<p>本論文は、1960年代後半から1970年代にかけてジャーナリズムの分野で活動した津村喬（1948-）に焦点を当て、そのテキストを通じて、津村の思想の形成過程と運動戦略を明らかにするものである。</p> <p>津村は早稲田大学在学時、主に入管闘争に関わっていたが、1970年頃から『現代の眼』や『構造』といった新左翼系総合誌、あるいは『中央公論』や『思想の科学』、『新日本文学』といった雑誌など、有名無名を問わず様々なメディアを通じてテキストを発信していた。そこで取り扱われたテーマも多様であり、メディア論、差別論、都市論、地域住民運動、反原発などが論じられた。津村の議論は、権力や資本がメディアを通じて人びとの生活習慣や身体を管理しており、日常生活の内部から対抗運動を目指すという点で、政治決戦主義的な新左翼党派のテーゼと一線を画すものであった。本論文では、津村のこうした現状分析や戦略がどのようにして形成されていったのかを明らかにすると同時に、ジャーナリズムを主な活動の場としていた1970年代中盤頃までのテキストを分析することで、津村のテキスト戦略についての考察をおこなった。</p> <p>序章では、先行研究の整理をおこないながら、津村のメディア論を主に論じることの意義づけをおこなった。津村は1970年代一般には差別論の論者として知られ、現在津村が参照される場合でもこの文脈で触れられることが多い。本論文の立場としては、津村の差別論の重要性を認めつつ、メディア論に焦点を当てることで、津村の思想とその戦略を広く捉えることを目指した。そのためにも、序章では津村の概念の中でも特に重要だと思われる「読み」という概念について整理した。読みとは津村にあってはテキストを読むということだけではなく、社会分析や歴史的コンテキスト、他者との関係などをその読みの対象としている。と同時に、読みとは対象を分析・認識するだけでなく、批判的視座を得ることによって対象そのものを変革していこうとする行為として津村が捉えていたこと、本論文もそのような行為として津村の読みを分析することを提示した。その上で、そうした読みという行為が、津村のテキスト上で停止してしまう局面について、本論文ではそれを「読みの躓き」として捉え、積極的に論じていくことを示した。読みが躓くとは、読む対象の他者性によって自分の認識や分析、解釈が停止してしまうことであり、それは自分自身の認識枠組みを問い直す契機であり、また他者との新たな関係性を築いていく起点になるのだと位置づけた。</p> <p>第一章では、津村の同時代的および歴史的コンテキストへの読みを分析した。津村の状況分析が広告批判を通じた消費社会への分析というかたちを取っていることに注目し、津村の記号論的な読みについて考察し、その読みが状況介入的なものであることを明らかにした。また、津村の戦後民主主義批判と日中国交回復運動の提唱の分析を通じて、津村の歴史への視座について論じた。津村の戦時期と戦後の歴史的な把握のあり方は、日本帝国主義の連続性として捉える点で、新左翼運動期には広く共有された認識だといえるが、日本のアジアに対する植民地支配が戦後日本のあり方や人びとの生活を規定している、とする点で特徴的である。こうした同時代的・歴史的コンテキストへの読みが津村の革命戦略の基礎となっていることを明らかにしつつ、このような読みが停止せざるを得ないようなテキストの局面について、津村が第三世界について論じるテキストを中心に考察した。津村の読みは、記号論的な分析や意味づけを特徴とするが、そうした読みが読む対象の他者性によって、否定されてしまう場合がある。こうした読みの躓きは、自分自身の認識枠組みのあり方を問い直すという意味で、否定的なばかりではなく、またそうした問い直しが他者との関係を新たに構築し直す契機となるものでもある。</p> <p>第二章では、1972年の新日本文学第十五回大会における津村の大会報告を通じて、彼のメディア戦略と、そこで起こった論争の分析をおこなった。この大会報告で津村はメディアを、権力や資本が人びとを管理・支配する手段として規定し、文学はその内容や思想によって人びとを教化していくのではなく、形式的側面、すなわちメディア作用によって読み手と書き手とを組織していかなければならない、とした。津村のこのような文学におけるメディア戦略は、主に年長の世代を中心として反発を引き起こした。中でも、文芸評論家の栗原幸夫は「政治と文学」論の立場から、</p>	

津村を批判した。この論争から見えてくるのは、津村のテキストや栗原への反論が、津村自身が論じるメディア戦略となることができなかつた、という点である。しかしその一方で、これらの論争に触発された『新日本文学』の読者、榎原理寿が読者投稿欄に寄せたテキストには、読み手と書き手の固定的な関係を打破し、変えていこうとする読みが内在していたことを指摘した。

第三章は津村の文体と引用の仕方に注目し、津村のテキストがどのように構成されているのか、という点について論じた。津村は引用の形式性について重視していたが、それはテキストが作家の個人性に還元されることを避けるためだったといえる。特に、本章では津村によるロラン・バルトからの引用を分析することで、津村の引用が自身のテキスト戦略に沿うかたちで意図的に読み替えられていることを明らかにした。その上で、本章ではそうした津村の文体が他とは異なっているテキスト、「日本的固執の根拠と陥穽」を分析し、他者との関係のあり方からテキスト自体が変容していくあり方について考察をおこなった。

第四章では津村のジャーナリズムにおける自身の活動の位置づけと、歴史を読むとはどういうことかを明らかにするために、戦前の経済学者、猪俣津南雄に対する津村の読みの分析をおこなった。津村は、猪俣がおこなったフィールドワークに基づく農村分析をジャーナリズムとして読むことで、自分自身のジャーナリズムでの活動のあり方を示した。それは、権力と資本による人びとの同一化の作用をもつジャーナリズムを内部から解体しつつ、テキストを通じて人びとの組織化を目指すことにあった。また、津村は猪俣の中国論にも注目しているが、この津村の読みから分かるのは、猪俣のテキストを通じて、津村が戦前から戦後に至る日本と中国の関係を読み直そうとしているということであり、ここに津村の歴史認識の形成のプロセスが示されている、と本章では論じた。

第五章は津村が食や気功といった活動を通じて身体を主要に論じていく 1970 年後半から 80 年代にかけてのテキストを主に分析し、津村の身体論がいかに論じられているのか、という点について考察した。津村の食や気功への活動の移行は、これまで政治運動からの転換と捉えられがちであった。本章では、津村の身体論を「身体の自主管理」という点から捉え、食や気功といった分野は、日常性批判の具体的な実践であると位置づけた。その上で、このような活動が、身体を通じた社会変革を志向する運動でもあることを明らかにした。

第六章は、津村のテキスト内で読みという行為が歴史認識を形成していく過程を改めて分析した。特に本章では在日中国人学生、李智成の死について書かれた津村のテキストから、津村の歴史認識の形成のあり方について探った。津村の歴史認識とは、歴史的事実を基礎として形成されている、というよりも、他者との出会いやそこでの構造化された差異の発見を通じて、現在との連関の中で読み出されるものであった。また津村にとって、李智成という在日中国人学生の死を読んだということは、日本によるアジアへの侵略という歴史が、1960 年代末を生きる津村にとっても無関係でないことを顕わにしたのだと位置づけた。そうした読みが歴史認識を形成していくということ、その過程を方法化する、ということが津村の戦略の一つとしてあり、それは歴史修正主義的な歴史認識が拡がりをもっている現在においても、重要な論点であることを明らかにした。

本論文は以上のように、テキストにあらわれた津村の読みから、彼の戦略と、歴史認識の形成過程を明らかにした。入管闘争をはじめとする、テキスト外の津村の実践活動に触れられなかったことは今後の研究課題であるものの、本論文では一貫して津村のテキストを分析することで、読みという行為をめぐる新たな視点を提示した。読みとはテキストを分析するという行為だけなのではなく、そうした分析が混乱したり滞ったりする局面にこそ、自己と他者の関係性を問いなおしていくような契機がある。それは同時に、異なる歴史的経緯をもつ他者との間で、歴史認識を更新させていくような力を持っている、ということ、最終的に本論文では明らかにした。

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 (鎌倉 祥太郎)	
	(職) 氏 名
論文審査担当者	主 査 大阪大学 教授 杉 原 達
	副 査 大阪大学 教授 川 村 邦 光
	副 査 大阪大学 准教授 宇 野 田 尚 哉
論文審査の結果の要旨	
以下、本文別紙	

論文内容の要旨及び論文審査の結果の要旨

論文題目： 読みと歴史認識の方法をめぐって——津村喬の思想史的研究——

学位申請者

鎌倉 祥太郎

論文審査担当者

主査 大阪大学教授 杉原 達

副査 大阪大学教授 川村 邦光

副査 大阪大学准教授 宇野田 尚哉

【論文内容の要旨】

本論文は、主に 1960 年代末期から 1970 年代にかけてジャーナリズムの分野で活動した津村喬（1948～）の言論活動に注目し、彼が当時の時代状況の中でいかなる思想を展開し、どのような運動戦略を構想したのかについて論じた研究である。序章では、先行研究の整理を通じて、津村が「読み」という行為をいかに捉え、自身のテキストで読みの実践をいかに行っていたかについて、差別論的アプローチではなく、メディア論として議論することを述べる。

第 1 章では、津村の初期のテキストに即して、同時代的コンテクストに対する読みを探る。政治的経済的支配よりも象徴体系に基づく文化的支配を重視した津村における主体の位置づけ方、中国の文化大革命に直面する中での津村の革命観、を検討した上で、とりわけ第三世界の登場を前にして津村の記号論的解釈が隘路に落ち込む局面を詳細に検討する。その読みの躰きの中に、読みという方法の多重性と困難があるとともに、他者へと開かれる可能性も内在していることを示す。

第 2 章では、津村の新日本文学会第 15 回大会（1972 年）報告を素材として、彼の革命戦略におけるメディア論と報告に対する諸反応を分析する。文学作品を、その内容よりもメディアとしての機能の側面を重視し、テキストが読者をいかに組織化できるのかを問うた津村の問題提起は、「政治と文学」という課題に長く関わってきた年長世代の反発を招き、津村の反論も論争の内実を深めるものとはならなかった。だがこの議論は雑誌『新日本文学』への読者投稿を生み出した。それは、テキストの読み手と書き手の位置を攪乱し、互いの関係を流動化・立体化させようとする津村の主張を根底的に提起し直すものであった。

第 3 章では、津村のテキストの文体と引用の仕方に焦点をあてる。「文体（スタイル）」と「エクリチュール」をめぐるロラン・バルトからの引用を検討し、ときに剽窃ともいえる読み替えを行いながら、津村がテキスト読解の戦略を立てようとした姿を具体的に明らかにした。他方、「日本的固執の根拠と陥穽」においては、他者への応答そのものが動揺し、それが思考にも文体にも表れ、津村自身が問い直されていく形でテキストが構成されていることを実証的に論じた。

第 4 章は、戦前の経済学者・猪俣津南雄に対する読みの検討を通じて、津村がジャーナリズムという領域でい

かなるテキストを書こうとしたのかを問う。マルクス主義理論家として知られた猪俣を、広範な農村へのフィールドワークに基づいて調査分析を実践したジャーナリストとして読み直すことによって、津村は1970年代の自身の活動の参照軸を示した。また猪俣の中国論への着目とテキスト分析は、アジアとの関係を、歴史と現在を重ね合わせる形で考察しようとする津村の歴史認識の展開を示すものと評価した。

第5章は、食や気功などを論じた1970年代半ばから80年代初頭の津村のテキストを、身体論の観点から分析する。先行研究では、こうした課題の転換をもって、津村が政治活動から撤退したとみなされてきた。だが「身体の自主管理」という視点に立つと、食や気功といった分野は、権力による身体の規範化や日常性への管理に抗する質を担い、また身体実践を通じて人びとを組織化する志向性を有する側面があることを指摘した。

第6章では、これまでの各章での分析をふまえて、津村のテキストにおいて読みという行為と歴史認識の形成との関連について問う。とくに在日中国人・李智成の死に関するテキストの分析から、さまざまな他者との出会いを通じて質的差異に直面し、自他の構造的関係性の中で、自身をその中に巻き込まれるような形で読みが躓きながらも深化する過程において、歴史認識が鋭く問題として浮上することを論じた。

終章では、本論文の成果を概括するとともに、今後の課題を整理した。

【論文審査の結果の要旨】

以上の内容をもつ本論文の特徴の第一は、難解な津村喬のテキストに丁寧に寄り添いつつ、読むという行為の意味をさまざまなレベルにおいて検討するとともに、それらを歴史認識という点に集約する形で深めたことにある。具体的には、メディア、文体、引用、ジャーナリズム、身体といったテーマを、相互に関連させつつ、積み重ねるように論じた上で、それらの考察の結節点ないし凝固点として、読みという行為が、歴史認識と不可分のものであることを示そうとしたものである。その作業は必ずしも十全ではないが、読みという行為と歴史認識のプロセスの重なりを方法の問題として彫琢するところに、津村喬の思想を現在進行形において受けとめながら考察する意義があることを明らかにしたことは貴重な成果といえる。

特徴の第二は、津村が進めようとした記号論的な読みの戦略を押し出すだけでは問題を正面から論じ切れず、テキストの更なる記述が立ちいかなくなってしまうという事態の前に躓く場面が生じることに注目した点である。行論の中で現れる困難を「読みの躓き」の問題として設定し、具体的分析を通じて、むしろその躓きの中にこそ、書き手と読み手の予定調和的な関係を内破し、他者との関係性を改めて再考せざるを得ないような局面の意味を見出そうとする。主体に関して言えば、自立した強い主体を求めるのではなく、他者との文化的・歴史的な関係性の中に巻き込まれている自身を発見し、自己解体を余儀なくされる中で問題を凝視するような主体のあり方に着目した。テキストと読み手の固定的な関係を問い直す形で、テキストを新たに開く可能性を追求する視点は、申請者が独自に編み出したものであり、従来の思想史研究の中ではオリジナリティがあると思われる。

とはいえ、問題点も少なくない。まず、同時代の思想や批評をめぐる言論状況の中で津村喬が、どのような特徴的な位置を占めたのかという点がある。次に、政治、社会、文学、食文化などの諸ジャンルを越えた津村の活動の基礎の重要な一つはミニコミ雑誌であり、メディアを論じるにあたってこの媒体の一層の調査分析が求められる。また、津村の生涯にわたる活動全体の中で、本研究が論じた問題の意義と限界を考えるという作業も残されている。

しかしこれらの点は、いずれも今後の課題であり、更なる研究によって克服が期待できるものである。よって、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。